

えてくれた。しかし長い間の戦争のため物資は欠乏していたが、あの苦しい戦闘のことを思えば何事もできるだろうと、祖国日本復興のため働きに働いた。

やがて日本は戦争のない平和を願いつつ、産業、経済分野では世界の先進国となったのである。あのような同じ人間同士が殺し合う悲惨な戦争は、次代を担う若い人達には味わせたくないと、平和の尊さを念じつつ、私の戦線での体験の一端を語り、終わりとします。

北支河南作戦

戦車第三師団機動砲兵

千葉県 佐久間 正 夫

大正十(一九二一)年二月十一日、現在の千葉県市原市に、農業と鶏卵の仲買を業とする家に生まれまし。市原市は現在は京葉工業地帯ですが、当時は千葉郊外の海浜に近い農漁村地でした。家業は先々代から

続いており、私は七人兄弟の長男で、三代目跡継ぎという立場でした。次男は既に海軍に志願をし、他の妹三人、弟二人の家族、私は適齢期となりました。

昭和十六(一九四一)年徴集兵の検査は、たしか五月頃であったと記憶しますが、第一乙種合格、現役兵ということでした。検査の前日、仲間と一緒に、牛久の丸子という料亭(私の得意先)へ行って、どうせ兵隊に行くのだから(当時は兵隊検査を受けて、初めて男として一人前だという風習が、我々の地にありました)ということ、前祝いというか、そんな気分です。人位の仲間と酒を飲んだものでした。

徴兵官は、酒気を帯びていることは承知でしたが、我々の心情を察したのか、半ば笑って見過ごしてくれたのでした。千葉の海岸ですから、漁師もおり農家もありで、都会とは違った、幾分、荒い気性の者も多かったでしょう。

昭和十六年十二月には、大東亜戦争が勃発。ハワイや南方での戦勝の気分のある昭和十七年二月一日、入営と決まりましたが、隊は東京世田谷の東部第十二部

隊で、輓馬野砲の連隊でした。しかし、その隊は我々にとつては一時の仮の部隊であり、長州の殿様の毛利公邸宅で昼食し、軍用列車で品川駅を出発したのは二月五日でした。

七日に門司着、出港。八日、朝鮮釜山へ上陸、朝鮮半島を北上。初めての外地のことで、緊張と好奇心と、若干の不安を感じて車窓から外を眺めたことも事実でした。

九日には、鮮満国境の鴨緑江を渡りました。その間は予防注射のみで、教育も何もなく、山海関から北支へ入り、十一日には北支の兗州へ着きました。全員が同年兵のみで、八十何人かを六個班に編成しましたが、所持するものは水筒と飯盒のみ、兵器は持たぬのだから、警乗兵が乗っていたのでしょう。

兗州で、冬服に防寒具をもらい、野砲兵第三十二連隊へ転属ということで申告、青木部隊長の訓示も夢中で、すぐに山東省の新郷に行き第二中隊小池隊に入りましたが、同年兵八十余人が六個班に分けられ、私は第二班でした。

入隊してから十一日間、日本を離れてからわずか四日間、中国大陸での軍隊生活が始まるのですから覚悟はしていても、不安と緊張の初年兵第一日目が始まるわけです。初年兵に対してお客様扱いは初日のみ、二日目からは腰など掛けていられない。次から次へと動き回るだけ、慣れないので、何から何をしたいのか分からない。また、夜は夜で悩みの一つ、点呼後、馬の手入れの状況や日常の動作に、何やかんやといちゃもんをつけ、初年兵を並ばせて整列ビンタ。平手はまだいい方で、はなはだしい時、平手では音が出るからと言って、げんこつとなる。一つの班が始めると、隣の班もビンタが始まる。

聞きしにまさる内務班での制裁である。数年後には私的制裁は禁止されましたが、私の初年兵当時は、まだまだ盛んに行われていました。しかし、この制裁も反面では体で覚えさせる、痛められた経験を忘れさせないための一手段であるとも言われておりましたが、直接被害を受ける初年兵にとっては、肉体的にも、精神的にも苦痛でした。気の弱い者の一部には自殺や、

逃亡を考えた体験を持ったと言っていました。

我々の野砲兵隊は、砲は馬に引かせて作戦に出る。

馬こそが機動の主体であるため、馬に慣れないというより、馬に触ったこともない都会育ちの人は一番可哀想でした。馬扱いの者は、朝食前に馬の手入れをするのだが、まず寝糞乾場に広げて、天日に当てて乾かさねば、小便臭さが抜けない。誰一人でも手を抜いたらば、古兵さんに「お前等は一銭五厘（葉書一枚の値段）で来るが、お馬は、百円以上出さねば来ないのだ」と怒鳴られる。

私は農家の出身だから馬の扱いはできたし、隣部落の人が被服係下士官であったので何かと助かりました。新しい服に交換してもらって班内に帰ると、古兵に取り替えられるが、制裁のある時は、「用事があるから」と下士官室へ行って、甘味品をもらって来ました。班内では、同年兵同志の対抗ビンタが一番いやでした。加減をして叩くと古兵に「こうやって殴るのだ」と殴られる。

三カ月間、初年兵、野砲は三人、六頭の馬で一門を引くのです。呼吸が合わぬといけない。だが馬の方が慣れていた。

六月中旬、一期の検閲が終わってすぐ、八路軍の討伐に出ましたが、これが私の初陣ともいいうべき戦いでした。そのことも、私にとっては忘れることのできないことなのですが、それにもまじっての思い出は、内地からの慰問袋や「北支の兵隊さんへ」という手紙が、枕元に置かれてあったことです。討伐での肉体的はもちろん、精神的な疲労を忘れさせてくれました。

その手紙は、奇跡的と申すか、同郷の女兒からでした。そして、さらに、その子は戦後、私の親戚の所へ嫁に行ったのです。また、慰問袋は、京都市下加茂岸本町の人でした。その手紙などは大切に家に置いてあったのですが、昭和五十九年の火災で焼けてしまいました。思い出の物がなくなつて、今でも残念に思っています。

昭和十七年十一月下旬、機動砲兵第三連隊・滝第五

三四六部隊の第二中隊、鴨志田隊へ転属しました。この転属は南方へ行った中隊で二十人くらいを除きほとんど全員の転属でしたから心強かったです。その場所は内蒙古の包頭でした。

南方へ行った人は、くじ引きで「O印」のあった人たちでしたが、その人達は南方の目的地へ着く前に輸送船が撃沈され、全員が戦没したと、後の情報で聞きました。我々は運良く助かったわけです。軍隊という所はまさに「運隊」であり、自分の意志ではどうにもならないことが、人の生死を決めてしまったのです。

機動砲兵第三連隊は、軍令甲第四二号により、昭和十七年十二月七日、編成に着手する。

機動砲兵第三連隊第一大隊―騎砲兵第一連隊主力
機動砲兵第三連隊第二大隊―野砲兵第三十二連隊
第一大隊

機動砲兵第三連隊第三大隊―野砲兵第一百連隊
第二・五・七中隊

一七・一二・一三 野砲兵第三十二連隊 包頭
着

一二・一四 綏遠省包頭騎砲兵第一連隊に於いて編成を完結し、爾後同地付近の警備に任ず

この編成によって、我々は、機動砲兵第三連隊となり、馬部隊から自動車部隊になり、体は楽になりました。牽引馬は牽引自動車の運転へと変わったのです。楽になったが、自動車は馬のようなわけにはいけません。一からのやり直しです。

私も古参兵へとなったのですから、ピンタはないが、教育をやり直しながら、八路軍と戦いました。黄河の水が凍ると敵が夜襲してくる。こちらの兵力が少なくと攻めてくる。演習中に攻めて来られて戦ったこともありました。その時は、歩兵が付いていなかった。九九式の銃と手榴弾、近接して来た敵兵には拳銃で戦いました。敵は、機動歩兵が付いていると攻めて来ない。

昭和十七年十一月から同十九年三月三十一日まで包

頭警備で、零下三―四十度という寒い冬を二回、包頭で越しました。包頭の冬は寒い、足踏みをしていないと歩哨に立ってられない。私は三年兵になったのですが、それまで初年兵は来ませんでした。

昭和十九年になり、やっと初年兵が来ましたが、その頃になると私的制裁は禁止ではあるし、自分の体験からしても、初年兵を殴るようなことはしませんでした。北支の戦場へ来た初年兵の心情や立場を考えると、私的感情で殴ることはできませんでした。

昭和十九年四月一日、京漢作戦参加のため包頭を出陣、南下しました。四月二十二日、黄河作戦ですが、第一次洛陽作戦の時に橋は落とされていました。我が軍の工兵隊の優秀な技術によって、高さ八メートル、幅三・五メートルの長い橋が架けられました。

その橋を戦車や牽引車が渡りました。我々も暗闇の中、無気味な流れの音を耳にしながら渡河しましたが、全部渡るのに一時間位はかかったかと思えます。ところが、渡り切った闇の中、警戒しながら、敵を意

識しながら前進すると、突然対岸から敵の機関銃、迫撃砲、曳光弾などを交えた集中攻撃を受けました。しかし、幸いに我が部隊は負傷者を出さずに夜明けとなりました。

我が部隊は、南岸の敵地、霸王城をまず攻略し、一路鄭州へと進撃して行きました。これからの戦闘が、敵の要所である洛陽攻略戦であったと聞いて、身の引き締まる感動を受けました。その時は、弾薬は豊富に持っていました。

楚河輔付近にさしかかると、機動歩兵隊が戦闘中である。これまでの間、ほとんど連続戦闘で、運転手交代で進撃していました。ところが吉松部隊がトーチカから撃たれ負傷者を出して苦戦中であるという。我が部隊は要請を受け、小池中尉の砲が堅固トーチカ陣地を砲撃し、敵を撃退させました。

その後、やっと休むことができましたが、臨汝鎮街道にさしかかった時、突然米軍B25軽爆撃機（双発機―ノースアメリカン）の機銃掃射を受け、数人の死傷者を出し、残念でありショックを受けました。私は先

行していたのでその難を免れたのです。中隊はさらに白沙に進みました。

ここで部隊は再編成され、古都であり、北支那の重要拠点である洛陽を再度攻撃すべく反転を命ぜられました。我が部隊は、砲二門を牽引し、その作戦に参加、進撃し、五月二十五日、多数の犠牲者をだしましたが、洛陽を陥落させたことは忘れることはできません。

その後、花園を通過して、老河口作戦に参加中、昭和十九年六月十五日、この地を離れ河南省襄城の警備につきました。その地で、ようやく待ちに待って補充された初年兵の教育を三カ月行いましたが、昭和二十年三月二十日からでした。その時、補充兵の中には、台湾の志願兵が交じっていました。教育は、牽引車、火砲の撃ち方などがありました。

その頃から情勢が悪くなり、警備・教育・警備・討伐（八路軍が攻めて来るとそれを追い払う）の連続でした。

昭和二十年七月二十五日、ソ連参戦の情報により北上し、北京の長辛店に着き、警備のため中隊はさらに北辛店にて北京警備の任に就いたのでした。

八月十五日の終戦の確認は北辛店で聞きました（我々は放送を聞いていない）。我々は、この戦いは勝つと思っており、終戦・敗戦はソ連の裏切り参戦によることを思うと断腸の思いでした。兵士は皆、怒り狂ったようであったことを、今でも覚えています。

敗戦となり、中隊は北京紫禁城庭園に移動、テント兵舎で生活をしつつ兵器を持ったまま北京城警備に就きました。

復員下令は、昭和二十年十二月五日頃であったと思います。従って、その日まで、我々の部隊には武装解除はありませんでした。

帰国は塘沽テンカクより、米軍上陸用舟艇（LST）に乗船したのですが、それまで持っていた兵器は、乗船時そのまま置いて来たのです。昭和二十年十二月十四日、佐世保に上陸し帰途につきました。

家に着いたのは、十二月十八日頃であったと思いま

す。予告もなく、突然帰りましたので、家族は「よく生きて帰れたなあ」と驚くやら喜びでいっぱいでした。祖父母・父母・弟妹、皆に迎えられたことは、幸せであったと思っております。

自動車第二十六連隊と

中国の思い出

京都府 大槻 二夫

私は大正十一（一九二二）年七月、綾部市で生まれましたが、父親が船の関係の方の仕事をしておりましたので、ほとんど京都の山代の方に住んでいました。その関係で中学は京都府立桃山中学校に入学、昭和十五年（一九四〇）年春に卒業しました。卒業式の日は三月十日の陸軍記念日でしたが、その時は既に私は大連に上陸し、三月六日にはもう北京に行っておりました。

それから一カ月ほど張家口の方で実習などをしてお

りましたが、小さい学校ですが、四月から北京中央鉄道学院と言う華北交通が国策で作っていた学校で、そこに入学、約二年間、土木工学を勉強し、卒業と同時に華北交通の本社へ勤務しました。

この華北交通本社勤務中、昭和十七年徴集兵として、北京の第一小学校で徴兵検査を受けました。その頃、私は過労気味で、ずっと北京の病院に入院しておりました。一人では到底徴兵検査には行けるような体ではありませんでしたので、看護婦に付き添われて洋車に乗って検査会場に行きました。しかし、徴兵官の陸軍大佐からは「この体なら、大丈夫だ、第一乙種だ」と言われて、甲種ではなかった訳です。

入隊は昭和十八年二月、山東省済南市郊外に連隊本部のあった自動車第二十六連隊（仁第四二二四部隊）にもちろん現役で現地入隊しました。

済南というところは、山東省の首都で、ちょっとした大都市でした。大体人口は百万人と言われ、そのうち日本人は約十万人おりました。どこへ行っても日本